

A-143「月出」(月出でて皎たり) 『詩経』国風 陳

「月のひかり」

AKY訳

月は白く澄みわたり

みめ美よき人の舞ふかげは

たゆたふごとくゆるやかに

うらぶる想ひ眼(まな)ニ離(かれ)えず

月はきよく澄みわたり

しな美よき人の舞ふかげは

うれふるごとくゆるやかに

みだるる思ひ眼(まな)ニ離(かれ)えず

月は照りて澄みわたり

しよさ美よき人の舞ふかげは

しなぶがごとくゆるやかに

さざめく想ひ眼(まな)ニ離(かれ)えず

(読下し)

ゲツシニツクヨウケイ
月出 皎兮
コウジンリヨウケイ
佼人 僚兮

月出でて皎たり

ジヨウウキユウケイ
舒窈 糾兮

佼人僚たり

ロウシンシヨウケイ
勞心 悄兮

舒にして窈糾たり

ゲツシニツクヨウケイ

勞心悄たり

月出 皓兮

コウジンリヨウケイ
佼人 慍兮

月出でて皓たり

ジヨウウジユケイ
舒優 受兮

佼人慍たり

ロウシンシヨウケイ
勞心 慍兮

舒にして優受たり

ゲツシニツクヨウケイ

勞心慍たり

月出 照兮

コウジンリヨウケイ
佼人 燎兮

月出でて照たり

ジヨウウシヨウケイ
舒夭 紹兮

佼人燎たり

ロウシンサンケイ
勞心 慘兮

舒にして夭紹たり

勞心慘たり

「明るく月が照る庭。月光に誘われたように若い女が舞っている。まるで影が揺れているようにゆったりと。ときおり、月の光に美しい顔が浮かび上がるように見える。わたしの心は、吸いつけられたようで目を離すことができないでいる。彼女への想いが、わたしの胸をしめつけるようだ。」

まるで舞台のような美しい光景です。藍色の背景、ただ一つ白い月が描かれています。若い娘が月の光を浴びながら舞っています。ゆつくりと漂っているかのように。こういう舞台での踊りは、玉三郎が極め付けです。玉三郎の魅力は、ポーズの美しさです。動きの中で一瞬止まったときの姿の美しさ。いつだったか、「驚娘」で雪の降りしきる中、白無垢でイナバウワのように身をそらした場面の美しさは、息を呑むような思いがしました。ここで踊るのは、やはり玉三郎でしょう。いや、待つて。春猿もいいかな。国立劇場歌舞伎俳優研修出身の猿之助一門ですが、最近では、大きな役もこなしています。これからの旬の役者です。姿がいいし、声もいい。気になっている役者さんのひとりです(歌舞伎の世界は、門閥以外でも、いい役者が大勢育っています。御曹司たちも刺激されたか、やる気がみえ、これから楽しみです)。

詩として訳すほかに、音読みするということも漢詩を楽しむ方法のひとつではないかかと思えます。もちろん、中国語で読むのでなければ、本当のよさはわからないともいえませんが、現代の中国語は、唐の時代以降はともかく、詩経の時代のものとは、大きく異なり、日本でおこなわれている音(おん)のほうが古い時代のものを伝えているとも聞いたことがあります。もともと、周の時代以前の発音など、正確なところは、誰もわからないわけだし、気軽に、音読みで音読するのも楽しいと思えます。

そんなことから、もとの詩に音読みのルビをふってみました。お経みたいだけれど、いちど声を出して、読んでみて下さい。

わたしなら、テンポは、ゆつたりと、歩く速さ(アンダンテ)で、うたうように(カンタービレ)。各句の最期の「兮(けい)」は、詩の調子を整えるためのもので、「ヘイ」とか、「ヨイショ」といったような意味のことばだけれど、この詩の場合は、むしろないほうがいくらい、休止符だと思っただけがいい。アウフタクトで次の句の頭につけるような感じで、ごく軽く、息を吸うようにしながら読む。その方が感じが出ると思えます。

「使われている言葉について」

- 皎(こう)、月の光の白く光るさま。
- 佼人(こうじん)、佼は、姣、しなやかな美しさ。美人、
- 僚、姿のよいさま、容貌が美しい。(毛伝「好き貌」)
- 舒、ゆるやか、しずか、おもむろ。ゆつくりと。
- 窈窕、窈は、窈窕、しとやか。窕は、身をくねらせる形、静かに舞う姿をいう。しなしなど、しとやかに。
- 勞心、心遣い。心がとられる。
- 悄、心がしおれる。憂い。
- 皓(こう)、白くひかるさま。
- 嫋(りゅう)、姿のよいさま。妖。あだつぼい
- 優受、しずか、ゆるやか。
- 慍、心の落ち着かぬさま。
- 照、照り光る。
- 療、明るい、すつきりしている。
- 天紹、しなやかに身をくねらせるさま。
- 慘、惨は、意味が通りにくい。朱子以来、「慄」の誤りであるとされている。(慄は、心せわしく、疲れる、憂えるの意。)